

明日への架け橋 若手技術者!

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.12

極東興和株式会社
東京支店 工事課

阿武裕斗さん Yuto Atake



憧れを仕事に変えて

橋づくりに情熱を注ぐ若手技術者



● PROFILE ●

あたけゆうと
阿武裕斗

1999年生まれ。香川県出身。広島工業大学工学部を卒業後、2021年に極東興和株式会社に入社。学生時代からコンクリート橋への興味をもち、現在は橋梁工事の施工管理に従事している。趣味はプロ野球観戦。広島カープのファンで、球場にも頻繁に足を運んでいる。

今回紹介するのは、極東興和株式会社で橋梁工事に携わる若手技術者の阿武裕斗さんです。同社は、橋梁工事のほか、道路等の社会インフラの整備や維持管理を通じて、全国の交通ネットワークを支えています。子どもの頃から橋が身近にあり、「橋が一番かっこいい」という真つすぐな想いを胸に、建設業界を志した阿武さんは、2021年に同社に入社しました。現在は工事課に所属し、橋梁工事における工程・安全管理を担っています。

「とにかく現場が好き」という熱い気持ちを原動力に、常に学び、前向きに挑戦し続ける阿武さん。その姿勢が入社1年目から現場代理人に抜擢されるなど、現場での信頼を築いていきました。仕事のやりがいや価値観、そして建設業界の未来にける想いまで、現場の最前線で働く若手ならではのリアルな思いを伺いました。

幼少期からの橋への憧れが 入社の決め手に

——建設業界を志したきっかけを教えてください。

私は香川県の出身なのですが、県内には瀬戸大橋があり、建設当時の話もよく聞いていたので、幼い頃から橋は身近な存在でした。また、スーツ姿のビジネスマンよりも、作業服で働く職人さんの姿に憧れていたこともあり、大学では環境土木工学を学びました。就職活動の際に改めて何を作りたいのか考えた時、「やっぱり橋が一番かっこいい」と思い、橋梁を専門とする当社を志望しました。

——入社後はどのような仕事に取り組んでできましたか。

最初の配属は茨城県坂東市で、県発注の橋梁上部工事に現場代理人として携わりました。現在は、中日本高速道路株式会社が発注する、東名高速道路の「清見寺橋他1橋床版取替工事」に従事しています。

——入社1年目で現場代理人になるのは珍しいと思いますが、大変なことも多かったのではないのでしょうか。

入社当初は「現場代理人」という言葉すら知らず、現場に配属されてからも右も左も分からない状態でした。しかし、3カ月目以降に現場代理人を任されてからは、「責任ある立場にいる」という自覚が芽生えました。入社後早い段階で、発注者と直接やり取りする貴重な経験ができたことは、大きな強みになったと感じています。

「安全第一」と「歩み寄り」

現場を動かす信頼関係の築き方

——業務において心掛けていることはありますか。



阿武さんが現在従事している、「清見寺橋他1橋床版取替工事」の現場。東名高速道路という物流の大動脈の一部であるため、厳密なスケジュール管理が欠かせない。

まず1つ目は「安全」です。どれだけ工程が順調でも、作業員さんや仲間がケガをしてしまえば意味がありません。全員が安心して作業できる環境を作ることが、何より大切だと考えています。2つ目は「相手が好きになること」です。自分のことを嫌っていると感じる相手に歩み寄るのは難しいですよね。だからこそ、まずは自分から相手を理解し、歩み寄る姿勢を示すことで、相手も心を開いてくれると思っています。

——これまでの業務の中で、特に苦労したことは何ですか。

現在担当している高速道路のリニューアル工事で、夜間に床版取替を実施したことがあったのですが、交通規制の期間が厳格に定められており、スケジュールを守ることが非常に大変でした。資材の発注ミスや施工トラブルによって工程が遅れるリスクもあり、大きなプレッシャーの中で作業を進めていましたが、工程



の見直しや関係業者との調整も行いながら、無事に規制期間内に完了させることができました。この経験から、施工管理の重要性と、関係者と密なコミュニケーションを取りながら事前準備を徹底させることの大切さを強く実感しました。

——「事前準備」の大切さを感じた具体的なエピソードがあれば教えてください。

周囲に相談せずに工程を自分一人で決めてしまい、想定外の事態に対応できなかったということがありました。これは入社して3年目ごろ、仕事に慣れてきた時期に起こったのですが、リスクの想定などが甘かったことも実感し、周囲としっかりコミュニケーションを取りながら作業を進めることの大切さを改めて学ぶことができました。

——現場では想定外のことが起こることも多いですし、臨機応変さも求められますね。

そうですね。例えば、今の現場である高速道路は50年以上前に作られたもので、図面と実際の現場状況が違う、ということがありました。ただ、そうした事態は協力業者の皆さんとも事前に予想していたので、問題なく対応できました。

「現場が好き」な気持ちは誰にも負けない

——仕事のやりがいを感じるのどんな時ですか。

「これは無理じゃないか?」と思うような厳しい工期や難易度の高い工事でも、「絶対終わらせる」という現場の一体感が生まれる瞬間に、やりがいを感じます。先ほどお話しした高速道路の床版取替工事でも、厳しいスケジュールの中、無事に規制を開放できた瞬間の達成感はとても大きく、安堵で全身の力が抜ける

ような感覚がありました。

——決断を迫られたときに、大切にしている軸は何ですか。

「安全」を最優先しつつ、「現場全体の最適化」を意識しています。複数の業者や関係者が関わる中で、自分一人の判断で動くのではなく、情報を共有しながら、現場全体として最善の判断ができるよう努めています。

——阿武さんはどんな仕事をしている時が「楽しい」と感じますか。

図面を見ながら「どうやって作るのか」と上司や協力業者さんと相談している時間が楽しいです。そして、



床版取替工事を終え、新設された下面の横桁をチェック。「この現場にはヤードの整備段階から関わっていて愛着があります。一つ一つの工程を着実に積み重ねて、現場が少しずつ形になっていく過程にやりがいを感じます」と話す。



支取替が完了した後の出来形検査の様子。全体の工程管理を着実にしつつ、品質確保にも細心の注意を払う。



作業員との密なコミュニケーションを通じて、施工が円滑に進むよう日々努めている。

実際に完成したときに感じる達成感が、現場ならではの魅力だと思います。

——「現場が好き」という気持ちが伝わってきますね。

現場は好きです。今はどんな現場でも初めての工程を扱うことが多く、毎日が学びの連続で、常に興味を持って積極的に取り組んでいます。この業界では「経験」が何よりも重要だと思っているので今後も色々な工程を学んでいきたいと思いますが、現場への「情熱」は誰にも負けない自信があります。

若手の活躍を支える 充実した研修制度

——御社の教育制度について教えてください。

経験年数や職階に応じて、社内外のさまざまな研修が用意されています。若手技術者研修では、入社1～5年目の社員を対象に、一つのトピックについてグループディスカッションを行い、最後にプレゼンを実施します。多様な経験を持つ仲間が全国から集まるため、自分の知らなかった知識や視点を得る貴重な機会になっています。また、「極東アカデミー」というアクティブラーニング形式の教育システムもあり、多様なコンテンツを手軽に学べるのが魅力です。

——資格取得に向けた支援もあるのでしょうか。

はい、資格取得のサポート体制も充実しており、安心して取り組めています。会社が独自に問題シートを作成してくれるため、それに取り組むだけでもとても勉強になります。さらに、論文の添削も受けられるので、働きながらも合格への道が開きやすいです。今年の4月には、1級土木施工管理技士の資格を取得できました。

——阿武さんは1年目から現場代理人を務めていらっ

しゃいました。背景にはこうした教育面の充実もありそうですね。

大手の建設会社では、ここまで早い段階から現場代理人を任せてもらえるということはありません。当社は中堅規模の会社だからこそ、早い段階から責任ある立場を任せてもらえますし、そのための教育体制も整備されています。若いうちからリーダーシップを発揮して仕事をしたい人には、当社のような環境はとても向いているのではないのでしょうか。

先人たちが築いたインフラを 守ることが自分たちの使命

——実際に建設業界で働いてみて、入社前とのギャップがありましたか。

入社前は「3K（きつい・汚い・危険）」のイメージがありましたが、実際には安全管理が徹底され、「4S（整理・整頓・清掃・清潔）」も行き届いていました。休みもしっかり取れるので、プライベートの時間も確保できます。入社前に抱いていたイメージとは良い意味で裏切られ、安心して働ける環境だと感じています。

——働きやすい環境へと業界の改善が進む一方で、人手不足などは大きな課題となっています。阿武さんは、今後業界はどうなっていくと考えていますか。

少子高齢化の影響で、人手不足は今後ますます深刻になると思います。その中で、私たち若手が技術や知識、そして仕事への想いを先輩から継承し、次世代に伝えていくことが重要です。50年以上前につくられたインフラを、これからも守っていくことが今の世代の使命だと感じています。だからこそ、これからの建設業界は「新設」だけでなく、「維持管理」の重要性も

ますます高まっていくと思います。

——足りない労働力を補うためには、業務効率化が不可欠だと言われますが、どのような取り組みが必要だと思いますか。

書類作成業務などは改善が必要だと感じています。現場では、安全・品質・工程・出来形管理など、膨大な量の書類があります。現在は現場で測定した内容を事務所に戻って入力していますが、現場で入力・共有できるようなシンプルで使いやすい仕組みが浸透すれば生産性が格段に向上し、業務効率化につながると思います。

——次世代を担う若手技術者にアドバイスをお願いします。

建設現場は、状況や人も毎回違い、新しい学びの連続ですが、私はこの仕事を通じて「社会の役に立っているな」と実感しています。最初は分からないことだらけだと思いますが、素直に質問し、地道に経験を重ねていくことが大切です。時には失敗もあるかもしれませんが、必ず先輩社員がフォローしてくれます。自信を持って積極的に取り組んでほしいです。

（取材日：2025年7月）

●取材後記●



取材を通じて印象的だったのは、阿武さんの誠実で温かな人柄です。「まずは相手を好きになる」という姿勢が、現場での信頼関係を育む大きな力になっていると感じました。また、中堅規模ゆえ早くから責任ある立場を任せてもらえる企業風土も、建設業界を目指す人にとっては参考なのではないでしょうか。